

—照り降り人形で晴雨を占う—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

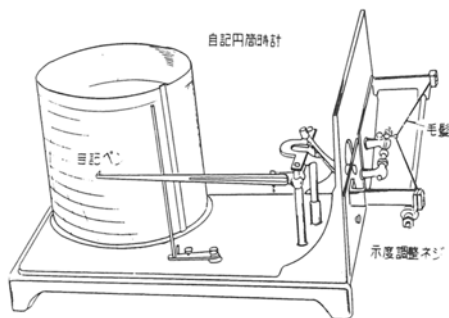
宮澤 清治

毛髪湿度計はロマンチックな器械だ

「梅雨どきになると、髪がすぐぺちゃんこになってしまうのよ。」とこぼす婦人が多い。

「髪がしっとりすると雨」という天気のことわざがあるように、毛髪には空気が湿ると伸び、乾くと縮むという性質がある。

これを利用したのが気象観測で使う毛髪自記湿度計(図参照)である。数本の毛髪を束ね、中央を特殊なカギでぴんと張り、そのわずかな伸び縮みを拡大機構を通じてペン先に伝え、自記円筒の紙に記録させる。毛髪は、湿度 100%のときに 0%のときの約 2%伸びる程度である。



毛髪自記湿度計

近ごろは、美術館や博物館では、大切な展示物を傷めないように毛髪自記湿度計や温度計を配置して、空調に努めている。

1783(天明3)年、スイスのソシュールが毛髪湿度計を発明した。女性の髪を用い、特にフランス女性の毛髪が最も性能がよいと、昔の気象学の本に書いてある。湿度が急変するとき、感度よく伸び縮みするからだ。それにしてもずいぶんロマンチックな器械である。

いまは毛髪を化学処理するので、他の動物の毛でも、色は黒でも褐色でも、縮れていなくても湿度計には十分使える。

近年は、気象庁では湿度を測るのに電気式湿度計(静電容量型)を用いる。湿度計の感部は、高分子フィルムを絶縁体とするコンデンサー構造でフィルムの吸湿性を利用し、静電容量の変化から湿度(相対湿度)を求める。ハイテク計器だが、毛髪湿度計には捨て難い簡便さがある。

照り降り人形は不思議な玩具だ

ウェザーボックスというおもちゃがある。

英語辞典には「晴雨表示箱一男女の人形が家から出たり入ったりして晴雨を示す。男の人形なら雨、女ならば晴れを示す。」とある。

写真は、ヨーロッパ製のウェザーボックスである。茶ダンスの上に置けるような飾り物で、家の柱には温度計も付いている。

英語とドイツ語で次のような説明書がはってある。

「晴れの日にはエプロン姿の女の子が、雨の日には赤い半ズボンの男の子がこうもり傘を持って出てきます。」

空気中の湿度が増減すると、小さな家の中の毛髪が伸び縮みし、その力で家の入り口から女や男の人形が出てくるという巧妙な仕掛けである。グレアム・グリーン「情事の終わり」という小説に出てくる。

日本にも昔から国産のウェザーボックスがある。京都の伝統玩具「照り降り人形」は、小さなわらぶきの家から照った日は大原女が、雨の日は歌舞伎の権太という「千本桜」の段の男が桶(おけ)をかついで現れるという仕掛け。戸板康二氏の「団十郎切腹事件」という小説にこの人形が出てくる。京都市で売られていたが、いま手に入りにくい玩具だ。



ウエザーボックス

今は、箱根の強羅や宮ノ下などの土産物屋で晴雨人形を売っている。晴雨と書いて「てりふり」と読ませる。

小さな合掌造りのわらぶき家の中央に柱が立ち、それを挟んで男女の人形が見える。立て札に「はれ女、あめ男」とある。

その言葉通り、晴天時は女が前に出てくる。それにつれて一対になった男が奥に引込む。反対に雨が降れば女が奥へ、男が前に出てくるという仕掛けだ。単純に見えるが実に不思議な玩具だ。湿度に敏感な毛髪(またはある種の繊維など)の動きがスローだから、人形の動きも非常にゆっくりで、例えば外の雨に気づいてふと人形をみたら、男の人形が前に出ていたという感じだ。

うっとりしい梅雨空が続くと青空が待ち遠しい。そんな気持ちを少しでも慰めてくれるのがこの人形である。

明治初期、信州の埴科郡(現千曲市)に次のような天気のことわざがあった。

「渡し舟場の綱が水面まで垂れると必ず雨、自然に引き締るときは晴れ」

昔は千曲川に架かる橋がなかった。岸と岸をロープで結び、ロープを操りながら舟で人や貨物を対岸に運んだ。ロープの張り具合を見て、天気を占った。まさに毛髪湿度計の原理と同じだ。先人の暮らしの知恵には頭が下がる。

筆者手持ちの照り降り人形はほこりをかぶったままだ。室内と戸外の空気をよく通うようにして、人形にも災害の予兆に働いてもらうことにしよう。